

小学校家庭科

令和2年8月27日

よりよい生活を創り出すために、
学んだ知識と技能を用いて自ら実践
しようとする子どもを育む学び

秋田大学教育文化学部附属小学校
佐々木 絵理子

家庭科における「学びをつなぎ、資質・能力を高めしていく子どもの姿」とは

- ▶ 生活事象に、多様な価値観があることに気付き、自分の生活を見つめ、ものの見方を広げ、生き方をより豊かにしていこうとする姿
- ▶ 生活をよりよく工夫するために、日常生活の中から課題を設定し、解決方法を考え、実践活動を評価・改善しながら、課題を解決しようとする姿
- ▶ 生活事象を科学的に見つめ、日常生活に必要な基礎的な知識及び技能を積極的に身に付けようとする姿

2年次研究の成果と課題

成果

実習中の観察や意見の交換，計画の見直しの場面で，自発的に省察を行い課題解決を図っていた。

子どもの願いを課題に反映させることで，解決に必要な資質・能力が明確になり，学習意欲や目的意識を引き出すことができた。

課題

体験的な活動の中で生み出された省察に対しての効果的な価値付けの在り方

設定された省察の場以外でも、新たな気付きや考えが生まれているが、活動の中で流れてしまいがちである。それらをフィードバックして自覚するための工夫が必要である。

令和2年度 家庭科 研究の重点

(1) 多様な価値を認め、判断し、選択・決定する学習場面を位置付けた題材構成

(2) 家庭科の「見方・考え方」を働かせ、次の学びへとつなげるための省察の在り方

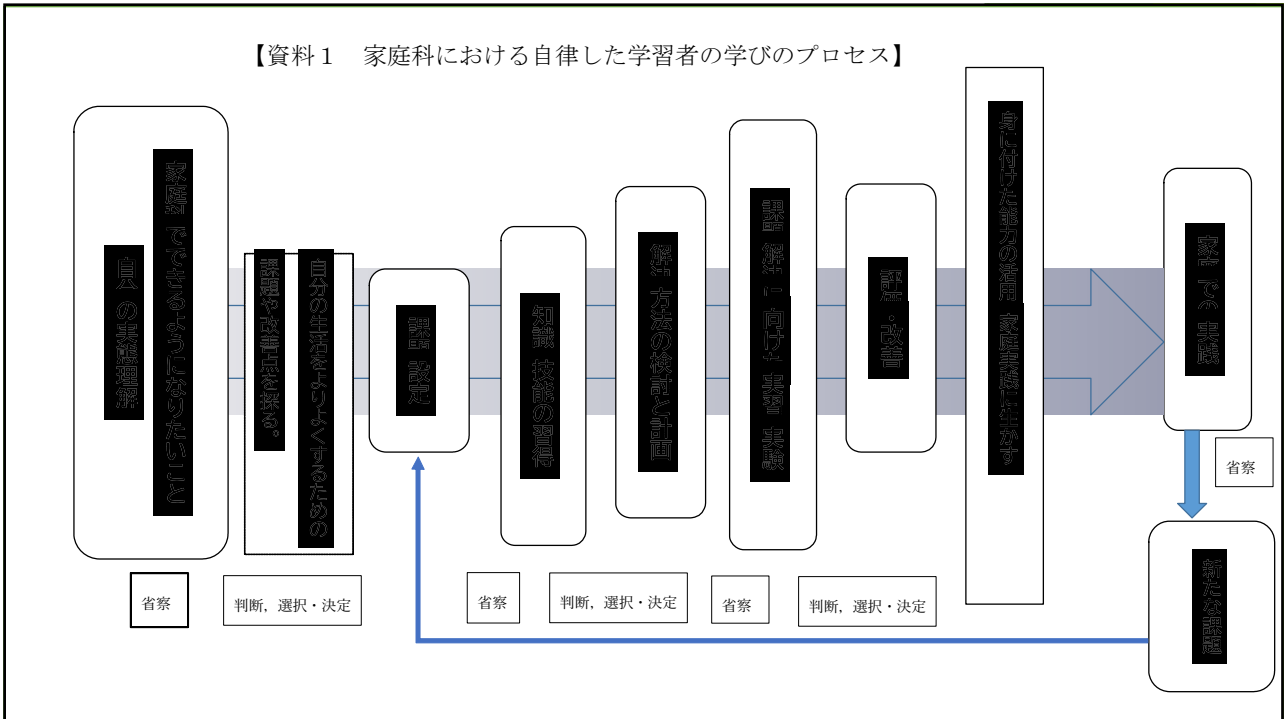
(1) 多様な価値を認め、判断し、選択・決定する学習場を位置付けた題材構成

家庭生活の多様化や家事の簡素化に伴い、子どもたちの生活様式は様々である。題材の中に、自己の生活において解決すべき課題を見出し、その解決のために、多様な価値を認めながら、それらを比較・検討する学習場を位置付ける。比較・検討の場面を通して、客観的に自己の生活を見つめながら、自分や家族、地域の生活をよりよくするための方法を根拠をもって判断し、選択・決定できる力を高めていく。そして家庭生活においても自己判断、決定できる実践力を身につけられるようにしたい。

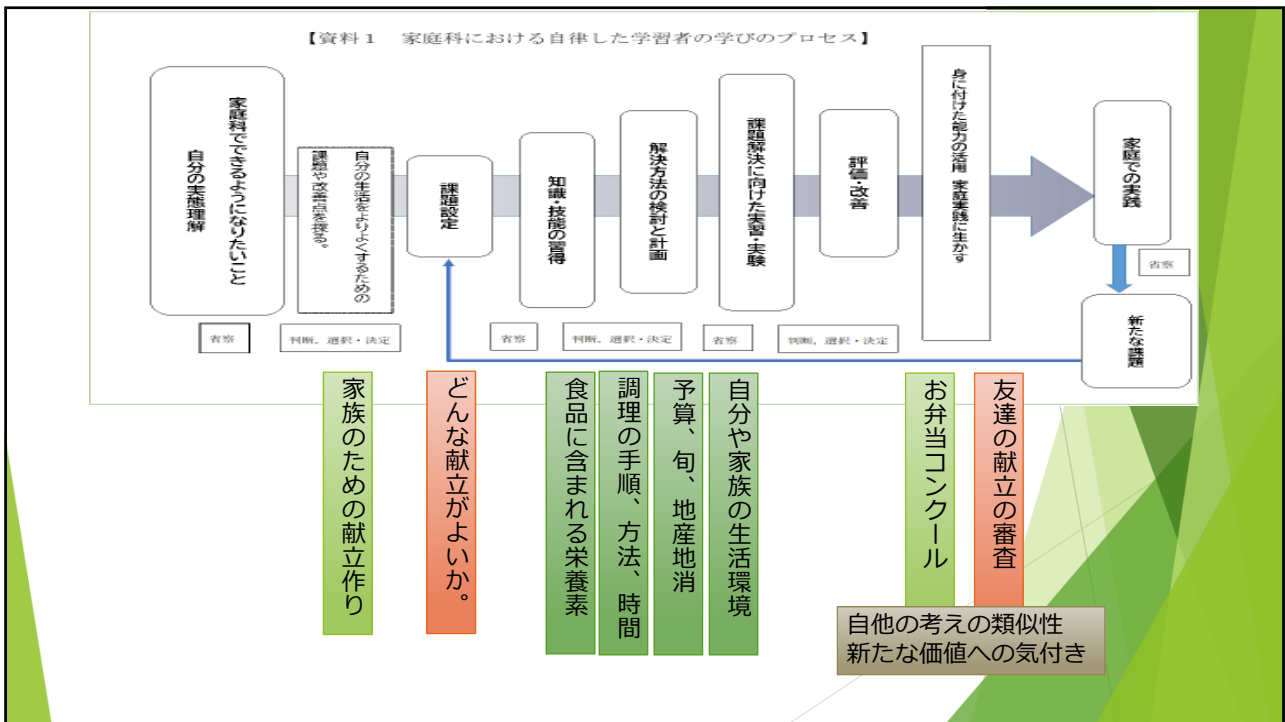
(2) 家庭科の「見方・考え方」を働かせ、次の学びへとつなげるための省察の在り方

様々な体験的な活動を通して、実感を伴いながら習得した知識・技能を、家庭での実践に結び付けることができるよう、生活の中から見出した課題の解決を目指して適切な省察の在り方を検討する。体験的な活動の中で生まれる新たな気づきや考えを、映像による実習記録やホワイトボードを用いた振り返りなどにより可視化することにより、その場だけの気づきでは終わらない、次の学びへとつなげるため省察の工夫を行う。

【資料1 家庭科における自律した学習者の学びのプロセス】



第6学年「こんだてを工夫しよう」



- ▶ 家族のための一食分の献立を立て栄養素に分類する学習を通して、食品に含まれる主な栄養素について知り、食品を表にまとめたり、給食の献立表を活用したりしてどのような栄養素が含まれているのかを調べる学習に取り組んだ。栄養のバランスを取る必要に気付くことで、始めに考えた献立を改善しようとする姿が見られた。

個の学び 個の省察

- ▶その学習を基にお弁当の献立を作成し「お弁当コンクール」を実施した。献立を考える学習においては「栄養」「調理の手順や時間」「予算」「季節や旬」「自分の生活環境」「地産地消」など多くの視点から課題の解決を図り、これからの生活に生かそうとする意識が高まった。

実践への意欲

多様な考え→協働的な学び

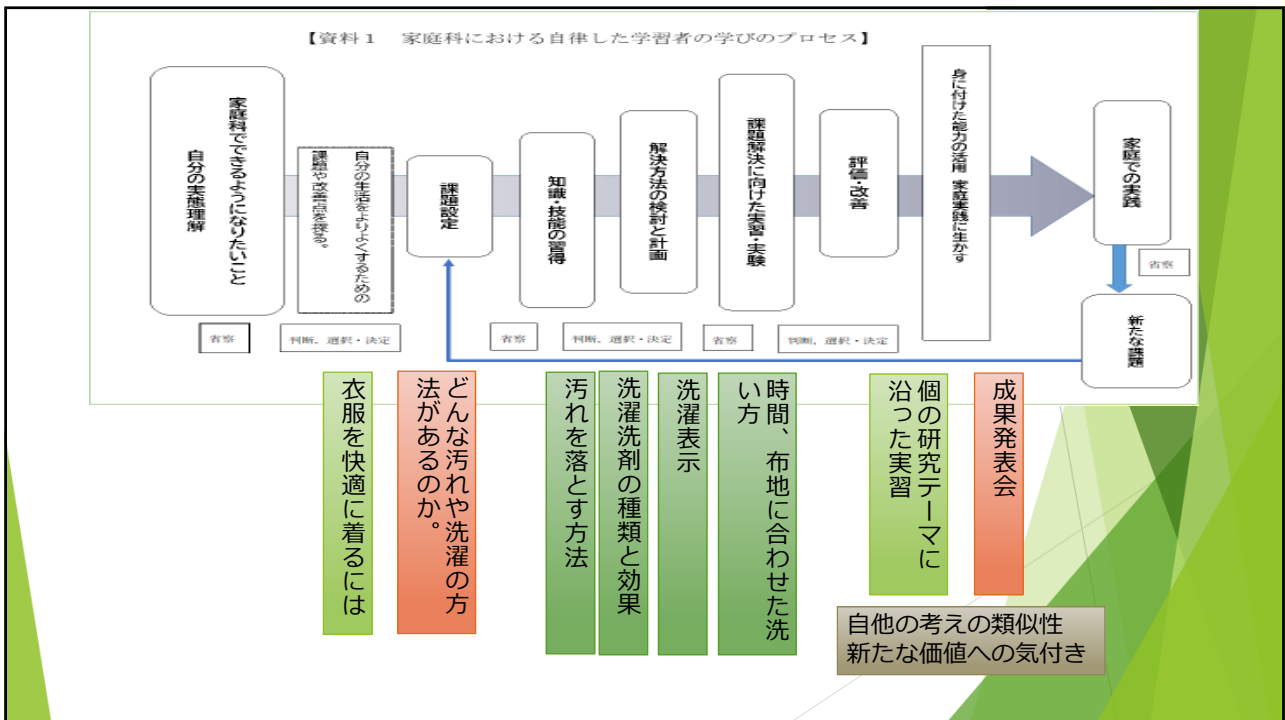
- ▶またコンクールを設定し互いの献立を審査し合うことで、自分と友達との生活や考えの中に類似性を見つけたり、新たな価値があることを発見したりしながら、多様な考えや価値を比較・検討し、生活をよりよくするための方法を選択・判断したり、身に付けた知識や技能を活用し実践したりしようとする態度が育ってきた。

実践への意欲

多様な考え→協働的な学び

第6学年 適切な洗濯の仕方を 調べよう

学習指導要領改訂における主体的・対話的で深い学びを実現するために、児童が自ら問いを発し、調べたいことをその場で調べて新たな知識を獲得したり、自分の考えを友達と共有し、比較・検討を行ったりする学習活動が重要となる。家庭科の授業にICTを活用することにより、教室内や教科書だけでは得られない、広い範囲での情報の収集が可能になる。今回、「衣食住の生活」の「日常着の手入れ 洗濯の仕方」の課題解決学習において、子ども一人一人がもった問いを解決するための手段として、タブレット型端末を活用した調べ学習の実践を行った。



衣服にはどこにどのような汚れが付いているのか、体育着や靴下などの観察を行った後で、洗濯の仕方について個々に課題を設定した。「外で活動することが多いので泥や砂の汚れを落とす方法が知りたい。」「どのような手順で洗濯をすると早く汚れを落とすことができるのか。」「洗剤を節約しながら洗濯はできるのか。」などの個人の研究テーマを設定し、タブレット型端末を活用して情報収集を行った。



- ▶ 身近な衣服に付着する汚れの種類を分類する学習を通して、衣服には様々な汚れが付いていること、長く快適に着るためには適切な手入れが必要であることや、洗濯の仕方や洗剤、表示など洗濯をするために必要なことについて**個人の研究テーマを設定**した。

個の学び 個の省察

- ▶ 同じ研究テーマで**共同研究チーム**を作り，科学的な見方を用いて、どのようにしたら汚れを落とすことができるのかを仮説をもとに**検証**する実験計画を立てた。

協働的な学び→個の学び
→実践への意欲

- ▶ **個の研究テーマと実験計画**を基に，洗濯実験を行い，汚れの落ち方を検証した。
- ▶ 結果を共有し，**比較検討**を行った。

実践への意欲
多様な考え→協働的な学び



個の研究テーマと全体の検証結果をもとに**個人の考察**を行い，**研究の成果**をまとめた。

実践への意欲
多様な考え→協働的な学び

【ICT活用における成果と課題】

【ICT活用における成果】

子ども一人一人の興味に合った情報を取得できる点で非常に効果的であった。

調べたことを全体で共有する場面においても、図や写真、動画などを提示しながら発表することで、視覚情報を伝えることができ、互いの理解を深めることができた。

個人の課題解決を図ったことにより、解決への意欲を高め、主体的・対話的な学びにつなげることができた

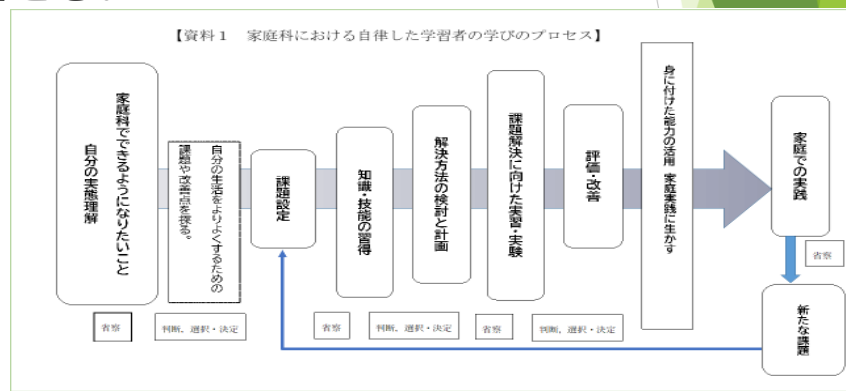
【ICT活用における課題】

タブレット型端末を使用することや子どもが機器使用に慣れることは、限られた時間の中で多くの情報に触れることにつながる。しかし、一人一人の学習の進捗状況その場で確認したり、タイミングよく助言したりすることが難しい点は課題と言える。

個々の状況を見取ることのできるサポートシステムソフトを活用するなどの手立てを講じて、個人の学習状況に合わせた指導や支援ができるように工夫していきたい。

令和2年度 取組の成果

○学びのプロセスをもとに題材構成をすることで、選択・決定や省察の場面が明確になった。他の題材や教科との統合を図ることでさらに学びのつながりを意識付けることが期待できる。



○選択・決定の場面では，なぜそれを選ぶのかを意識させることで，根拠が明確になり，科学的な考え方につなげることができた。

○個人で研究テーマをもち，課題に取り組んだことにより，個で知り得たことや実習を通して体験的に学んだことを省察する場を多く設定することができた。

令和2年度 取組の課題

○課題設定において個人の実態に合った課題を設定することは有効であるが，知識・技能が十分に身に付いていないと個人で解決を図ることは難しいため，基本的な技能の習得に十分に取組みさせる必要がある。

○個の学びと協働的な学びの場面の設定を工夫することでより効果的な題材構成ができるのではないか。

「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」等を踏まえた実習における工夫について

〔被服における事例〕

題材名「オリジナルのマイバッグを作ろう」

児童同士の近距離によるグループ活動や、接触、密集、教具の共有を防ぐために、教室、理科室、家庭科室の3か所に活動の場を分散して設定した（資料1）。教室では主に、型紙の立案やしつけ掛けなどの自分の机に座って行うことのできる活動を行った。理科室ではアイロンがけや裁断を行い、家庭科室はミシン掛けが行えるよう環境作りを行った。裁ちばさみやまち針などの裁縫用具は個人所有の物を使用させた（資料2）。ミシンは糸の色を固定して使用する児童を絞り、使用前後の手洗いの徹底を行うことで接触感染を予防した（資料3）。ミシンや作業台は学習後に消毒を行った。



【資料1】活動場所の分散



【資料2】個の活動場所の確保



【資料3】使用児童を固定化したミシン作業

題材名「すずしい着方を工夫しよう」

どのような着方をしたら暑い季節も快適に過ごせるのかを話し合う活動において、対面での話し合いを避けるために、それぞれの考えた着方の例をイラスト化し、テレビ画面に映し出すことで比較検討する場を設けた（資料4）。グループでの話し合いに比べ、全体で情報を共有することができた。また、複数のイラストを同時に提示することで比較しやすいという利点があった。



【資料4】イラストによる着方のアイデア



【資料4】イラストによる着方のアイデア

〔調理に関する事例〕

題材名「いためて作ろう おいしいおかず」

グループによる調理実習ができないことから、デジタルコンテンツを活用して野菜の皮のおき方、切り方、調理の手順などを確認した。教師が演示するよりも手元や食材を大きく見せることができ、方法を共有するために有効であった。しかし、技能の習得という点では実際に実習ができないことで、技能面の習熟を図ることが難しく、知識に偏った学びになることが危惧される。家庭との連携を図り、授業で身に付けた知識を実際に経験して技能の習得に結びつけられるように工夫していきたい。

